

高木 邦格理事長 式辞

国際医療福祉大学医学部に入学された新入生の皆様、本日はご入学おめでとうございます。約30倍という入試の難関を突破された皆様を、本学医学部の第一期生に迎えることができ、大変嬉しく思います。また、これまで支えてこられた保護者の方々にも心よりお祝い申し上げます。

本日は、国内外から多くの方々にご臨席いただきました。公務多忙のなか、内閣地方創生、規制改革担当大臣の山本幸三先生、千葉県からは森田健作知事と多くの県議会議員の先生方、また、自民党の国際保健医療戦略特命委員長 武見敬三先生、医学界から日本医師会長の横倉先生、千葉県医師会長の田畑先生、日本医学会長の高久先生をはじめ、全国の医療系大学を代表する多くの先生方、そして、成田市からは小泉市長と市議会議員の先生方をはじめ、多数の地元の方々にもご臨席いただいております。

海外からは、ベトナムのキム・ティエン保健大臣、ラオスのブンコン保健大臣をはじめ、各国を代表する大学の学長や先生方に多数ご臨席いただき、厚くお礼申し上げます。

本日ここに、医学部の開設と140人の医学部第一期生を迎えることができました。ここに至るまでには多くの困難がございましたが、この日を迎えることができましたのは、本日ご臨席の方々のご指導ご協力の賜物と、心より感謝申し上げます。また、開設にあたり、たくさんの方々から多くのご寄付を賜りました。改めて御礼申し上げます。

国際医療福祉大学は、医療福祉専門職の地位向上と、東南アジアを中心とした各国のリーダーの育成を視野に入れ、1995年に栃木県大田原市に開学した日本初の医療福祉総合大学です。現在、5キャンパスに大学院を含め約7,800人の学生が学んでおり、これまで2万人を超える卒業生を医療福祉の現場に輩出いたしました。また、高い国家試験合格率や就職率、卒業生の質が高い大学として、戦後の新設校の中でも有数の大学という一定の評価をいただけるまでになりました。

本学では、チーム医療の中で中核となる医師を育成したいと、10年以上前から新しい医学教育の実現に向け、元日本学術会議会長の黒川清先生を初代委員長に迎え、『新医学教育制度に関する検討会』をスタートさせました。2010年には、本学2代目大学院長の開原成允先生を委員長、3代目大学院長の金澤一郎先生を副委員長とした「医学部設置準備委員会」を発足し、議論を重ねてまいりました。

開原先生は、私どもがめざす新しい医学教育の理念と基礎を築いてくださいました。金澤先生は日本学術会議会長や皇室医務主管を務めながら、さまざまな検討会を主催し、これまでの議論に具体的な道筋をつけてくださいました。両先生は残念ながらご逝去されてしまいましたが、開原先生・金澤先生の遺志をつぐ形で、その後、前学長の北島名誉学長、天野大学院長、矢崎総長に、医科大学の具体化の検討などご尽力いただき、本学の教職員が一丸となって本日の開学を迎えることができました。

私どもは世界各国の医学部を多数視察しながら、今必要とされている新しい医学教育やカリキュラムについての検討を進めておりましたが、多くの障害があってなかなか実現に至りませんでした。医学部の新設は、法律事項ではなく大臣告示のみで規制されております。当時本学の評議員会議長で最高裁判事を務められました須藤正彦先生と顧問弁護士団に、この大臣告示が法的に有効か検討していただいたところ、違法である可能性が高く、もし行政訴訟を起こせば勝つだろうという結論が出されたため、2013年には大学理事会評議員会において、行政訴訟に踏み切る決定をしておりました。そんな折NHKのニュースで、岩盤規制に突破口を開けるといって国家戦略特区の募集を知り、チャレンジしてみようということになりました。

その一方で、2010年から医科大学構想に関するシンポジウムを開催されるなど、医学部や医療クラスターの誘致に積極的に取り組まれている成田市を、千葉銀行からご紹介いただきました。本学のメインキャンパスが栃木県にあるため、当初医学部は栃木での開設を検討しておりましたが、小泉市長・関根副市長にお会いしたところ大変な情熱を持って成田市に誘致いただき、協議を重ねた結果、国家戦略特区に共同提案するという合意に至り、2013年秋、成田市とともに「国際医療学園都市構想」を提案いたしました。

その際に私が申し上げたのは、超高齢社会の進展に伴う疾病や年齢構造が変わるなか、また憲法上、教育の自由があるにもかかわらず、なぜ40年間も医学部新設が認められないのか、全く新規参入を認めないのは先進国では日本だけであること、首都圏における高齢者人口が増えたことに伴う医療需要の増加、先進的なiPS研究や医薬品の開発、また海外を視野に入れた医師の養成などを考えたとき、日本の医療や医学の進歩のためには、新規参入と競争が必要であることをお話しいたしました。

特区の医学部に対しては、内閣府・文科省・厚労省から、国際医療拠点としてふさわしい教育と人材採用などいくつか条件が示されましたが、本学としてはその条件をはるかに超える医学部をつくろうと努力いたしました。

皆さんの教育にあたる教授陣について申し上げます。大友邦学長は、前東京大学放射線科教授で、昨年4月に本学の学長に就任いたしました。放射線学会理事長を5年間務め、日本医学放射線学会総会会長を2度も務めた、放射線医学分野の第一人者でございます。

医学部長には、東京大学で医学教育の責任者を務めた北村聖先生を迎えました。医学科長の吉田素文先生は、九州大学の医学教育責任者で、先日の医師国家試験委員長も務め、50代で九州大学を辞め本学に来てくださいました。この2人は、日本の医学教育の根幹となっているOSCEや共用試験制度をつくってこられました。

医学教育統括センター長には、スタンフォード大学やピッツバーグ大学で活躍した赤津晴子先生を迎えました。赤津先生は「アメリカの医学教育」という本を書かれ、先生に憧れて留学した学生が多数おられます。

こうした医学教育のエキスパートをはじめ、300人を超える医学部の教育陣には、海外での経験豊富な人材や外国人教員が多数おります。教授陣には、全国の医科大学や海外から帰国した新進気鋭の人材が集まりました。中には、現職の医学部教授を辞めて来てくれた方もおります。まさに、日本の医学教育の夢を実現するために集まったスタッフでございます。

また、2020年には成田市畑ヶ田地区に、アジアのハブ病院をめざした国際医療福祉大学成田病院を開設する予定です。さらに来年には、大学院に公衆衛生学専攻や医学専攻を新設し、感染症国際研究センターや国際遠隔画像診断センターなども設置することで、ますます教育と研究の環境が充実いたします。

新入生の皆さん。医師という社会的責任を自覚し、経済的なことを目的とするのではなく、例えば海外での医療協力やこの千葉県の地域医療に貢献するなど、国内外の診療に従事するほか、先端的な医療や基礎医学の分野でも活躍していただきたいと思っております。

6年間のフルスカラーシップを受けている留学生の皆さん。これだけの奨学金を受けられるのは日本人でも難しいことで、皆さんはとても恵まれた環境にあります。奨学金の目的は、皆さんが母国の医療水準を向上させる医師になることです。どうかその自覚を忘れず、将来母国のリーダーとしてアジア全体の医療向上に貢献する決意を持ち、勉強に励んでください。

本学は、チーム医療・チームケアに貢献できる医療福祉専門職を育成している大学です。皆さんはそのチーム医療の船長として、他職種に対する尊敬の念や思いやり、患者さんに対する慈しみなどを忘れない医師になってください。

現在工事中の教育棟がすべて完成いたしましても、これからスポーツ施設の設備や、新設予定の成田病院との交通網整備など、まだまだ多くの課題がございます。地域と一体となった国際医療学園都市を完成させるためには、関係各位のご協力を仰がなければならないことが数多くございますので、どうか引き続きご指導をよろしくお願い申し上げます。

6年後の完成年次には、成田市に在籍する学生や教職員は約5千人になります。また、成田病院が完成し、医療関連の企業や研究所および世界中から患者さんが集まりますと、10年後20年後にはこの地域に1万人を超える人が集うこととなります。

今後も、千葉県の医師会や千葉大学、地元の皆様と協力しながら、医療・福祉・教育分野に貢献していくことで、成田市や千葉県の皆様から、国際医療福祉大学があっけよかったと言ってもらえるよう努力してまいります。そして、将来必ずや国際医療福祉大学が、アジアを代表する世界的な医科大学になることを信じております。

本日は、多数のご来賓の方々にご臨席を賜り、誠にありがとうございました。重ね重ね感謝を申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

平成29年4月2日

学校法人 国際医療福祉大学
理事長 高木 邦格